■河合典彦氏ヒアリング記録
日時：2020年12月22日火曜日　18時00分～20時00分
ヒアリング対象：国土交通省　淀川環境委員会委員　河合　典彦　氏
参加者：一般社団法人水辺ラボ　廣井・三谷

淀川を中心に環境教育や自然保護の活動される河合典彦さんに、自然との共生という視点からみた東横堀川の可能性についてお話を伺いました。

1956 年、大阪市に生まれる。1979 年、近畿大学農学部水産学科卒業。私立高校、大阪市立中学校の理科教員として計 42 年間教壇に立ち、2021 年 3 月に再任期間を終え退職。1997 年から国土交通省淀川環境委員会委員、環境省希少野生動植物種保存推進員の委嘱を受け現在に至る。淀川管内河川レンジャー福島・毛馬運営会議代表、淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク理事・事務局長。少年時代に地元の淀川で淡水魚の世界の素晴らしさに感動。以来、淀川の環境保全・復元について研究をおこなっている。

大人も子どもも、実体験から学べる機会が少ない。環境に関心を寄せてもらうためにも身近に体験の場が必要。

● これまでの東横堀川での取り組みでは、防災や自然、環境教育という視点があまりありませんでした。河合先生が淀川などで取り組まれてきた活動を教えていただけますか。

（河合）
毎年、春から秋にかけて、淀川のワンドや干潟などで、子どもたちを対象とした水辺の体験活動を実施しています。子どもたちは目を輝かせて参加してくれています。

【淀川で子どもたちの水辺体験活動　柴島再生干潟】

● 子どもたちは、どういうきっかけで参加しているのでしょうか。

（河合）

参加者は主に小学生で、保護者が関心をもって生きもの好きの子どもを参加させている場合が多いと思います。最近は学校現場でも急速に ICT 教育の導入が進んでいる一方で、実体験ができる場が軽視されていると感じますが、実体験することと、画像や映像等の視聴をとおした疑似体験から得られる情報量や情報の質には「格段の差」があることを十分に認識する必要があります。また教員も実体験の経験が少ない人が増えており、子どもたちに説得力を持って伝えることができなくなっています。大阪市内では両岸合わせて 30 キロメートルも淀川に面しているまちがあるのですから、もっと淀川の環境や歴史・文化を学び伝える機会が増えてほしいと思います。例えば、淀川沿いの学校の校歌には「芦・葦」がよく出てくるけど、どんなものか見たことがなかったりするので。毎年夏に淀川で教員対象の野外研修会も実施しています。

● どのようにしたら、身近な水辺の環境に関心をもってもらえるでしょうか。

（河合）

環境にとって一番マイナスなのは、開発よりも「無関心」です。知らないがゆえに誤ったイメージを持ってしまっています。例えば、漁協は大阪のシジミやウナギをもっと売り出したいのですが、現在の淀川の水質は非常に良くなっているのに、「淀川は汚い」という以前のイメージをなかなか払拭できずに苦慮されています。小さな頃から自然の中で水に触れる機会をもつことが大事ですね。そのためにも、まずは保護者や教員自身が水に触れる、川で学ぶ場をつくり、子どもたちに伝えていくことができればと思います。

水の中にいる生き物や水質の観察、人工の産卵床をつくるのも面白い。浅瀬は生物多様性につながる。

● リアルな体験の重要さを改めて感じます。東横堀川でも水辺の体験ができるきっかけづくりに取り組んでいきたいと考えていますが、河合先生から見て、東横堀川ではどのようなことができると思われますか。

（河合）

淀川から東横堀川に流れてくる水にはたくさんのプランクトンがいるので、採集して観察するのも面白いと思います。肉眼で見えるものもいますが、ルーペで見たり、顕微鏡で見たり。魚が見えなくても水の中にたくさんの生物がいることがわかります。採水して水質を調べてみるのもよいでしょう。大阪市では、環境局が「おおさか環境科」という副読本を小学 3・4 生年版、5・6 年生版、中学生版の 3 種類を作成していて、市内の児童・生徒全員に配付しています。それには、大阪の水環境の情報などもたくさん掲載されていて、大人が読んでも面白いと思います。

● 東横堀川ではよく亀を見かけます。

（河合）

今見られる亀はほとんど外来種かもしれません。春に大阪湾から木津川や尻無川を通って遡上してくるアユなどが見られるかもしれません。きちんと調べてみると、意外にもいろいろな魚が生息しているのではないでしょうか。フナやコイがいるのであれば、ポリエチレンの平巻きテープを使って 40～

50cm の長さのポンポンを作って、水面近くに垂らしておくと産卵するかもしれません。産卵には本来浅瀬が必要なですが、浮桟橋に人工産卵床（キンラン）を張った木枠を浮かべておくという方法もあります。もし産卵したら、卵や稚魚を観察することもできますね。産卵は 4 月上旬から 5 月にかけて行われます。

● 近所の方から「ちゃんとルールを守って楽しくできるなら、釣りをしたい」という声も多くいただいています。阪神高速の橋脚の下は航路になりますが、邪魔にならない場所での釣りは問題がないのではないでしょうか。

（河合）

東京のスカイツリーを近くに望む親水公園で、水路が釣り場として開放されていて、地元の人がたくさん釣りをしているのを見かけたことがあります。釣りはぜひできるとよいですね。

【東京錦糸町付近では水路が釣り場として開放されている】

● 新型コロナ禍の前は観光客が多く、毎日たくさんの船が東横堀川の水門を通っていました。現在、川沿いに花を植えるなど景観づくりに取り組んでいますが、なかなか大変です。

（河合）

確かに今は少し殺風景ですね。水耕栽培や、できれば芦（葦）みたいなものを栽培出来たら面白いですね。芦は大阪の原風景を象徴する植物です。かつては大阪の府花とされていたこともありました。生育条件にうまく合えばよく育つと思います。高速道路の下なので、日照条件を調べて、その中で育つ植物を植えてみるのもよいでしょう。

● 東横堀川ではこれからの 20 年間で護岸改修が予定されています。

（河合）

遊歩道の整備はもちろん良いと思いますが、遊歩道や川として治水上必要な断面積は確保したうえで、許される範囲で、少し浅い部分をつくることができれば嬉しいですね。コンクリートでも構いません。浅い部分があると、そこに堆積物が溜まり、そういう場所があるだけで、フナやコイが産卵したり、稚魚が育ったりする可能性が広がります。環境が多様なほど、いろいろな生物が棲みつきます。石や瓦など礫質のもの、多孔質のものを入れると、表面積が大きいのでバクテリアが発生し、接触酸化によって水質がよくなります。また、魚の隠れ家にもなります。こんなところでこんな魚が採れるなんて、というインパクトのある体験を、ぜひ子どもたちにしてもらいたいです。

色々な制約はあると思いますが、今後 20 年かけて実施する護岸改修のどこかのタイミングでそのような提案ができて、スポット的にでもそういう場所をつくることができるとよいですね。そのためにも、まずは何が生息しているのかなど、調査をしてみるとよいでしょう。

子どもの目線で楽しめる、生き物と触れ合える水辺を。

● 最後に、参考となる河川の事例などがあれば教えてください。

（河合）

JR 岡山駅のすぐ近くを流れる水路には、遊歩道と石組みの護岸があり、自然に魚がいっぱいいます。この水路は灌漑用水路で、灌漑期以外は 20～30 ㎝程度の浅さですが、新幹線の駅のすぐ近くでもこんなにいろいろな種類の魚がたくさんいるんだと驚きました。

水都大阪の取り組みなどは大人の視点のみで、子どもが楽しめるという視点があまりなかったように思います。子どもの視点とは、生き物に触れることができるということ。安全管理のため仕方がないのですが、水辺に近づくことができない川も多くあります。もう少し川が身近にあるような環境づくりができればと思います。その点でいうと、京都の鴨川は物理的にも心理的にも川が近いですね。条件が異なるため一概に比べることはできませんが、東横堀川の一部でも親しみやすい環境づくりができればと思います。

【JR 岡山駅近くの水路】

【水遊びで賑わう京都・出町柳　鴨川デルタ】

● 河合先生ご自身、東横堀川の周辺にご縁があるとお聞きしました。これからもぜひよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

以上